

委託事業実施内容報告書
2019年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】

実施内容報告書

団体名：社会福祉法人さぼうとにじゅういち

1. 事業の概要

事業名称	外国人住民と日本人住民が本気で「防災」に取り組むための日本語教育展開事業
事業の目的	【目的】 本事業の目的は、地域日本語教室を難民等外国人住民の「防災」日本語学習の拠点として位置づけ、「防災」に関する日本語学習をきっかけに、地域日本語教室、外国人コミュニティ、外国人支援団体、自治体等をつないだ日本語教育の体制整備を進めていくことである。自助共助の意識を強くもった外国人住民・日本人住民が育っていくことを期待している。 【今年度の目標】 ●外国人住民が「防災」について学ぶために有効な紙芝居型防災教材「本気で防災を学ぶ紙芝居型日本語教材」(以下「本気で防災日本語紙芝居」)を完成させる ●教室活動の中に「防災」を無理なく取り入れた地域日本語教室のモデルを提示する ●「防災」を教室活動に積極的に取り入れる意識をもった「担い手」を育成する ●「外国人住民と防災」「防災と日本語」の重要性を認識し、「地域日本語教室」の有用性を理解する人を増やす ●地域日本語教室、外国人コミュニティ、外国人支援団体、自治体等の連携の基盤をつくることを目指し、まずは難民支援団体を中心にした「本気で防災を考える日本語教育評価委員会」を発足させる
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	(当団体の主たる支援対象者である「難民」の場合、国での迫害を逃れ、他国に保護を求めた方々であり、まずは「安全な環境で安心して日々暮らすこと」が日本に在留する目的である。彼らの場合、自国政府からの保護や支援は期待できない。また、難民的背景をもたない同国出身者と不用意に接触することはできないという事情もあり、地域との関わりがもちにくい。そうした特異な事情から、以下は「日本語教育活動に関する地域の実情・課題」というより「難民的背景をもつ方々」についての日本語教育活動に関する実情・課題となる。) これまで「条約難民」等の大半を占めていたミャンマー出身者の多くは、同国人(同民族)コミュニティを生活の拠点として頼り、そこそこ活発な情報交換も行いながら、日本での生活基盤を固めてきた。しかし近年、たとえば平成29年の難民認定者は「エジプト、シリア、アフガニスタン」(国籍別認定数の多い順)等20人、平成30年の難民認定者は「コンゴ民主共和国、イエメン、エチオピア」等42人となっている。強固な同国人(同民族)同士のコミュニティをもたない難民が増加してきている。当団体も、コンゴ民主共和国、エチオピア、シリア、ウガンダ等、属するコミュニティをもち、日本への定住にかなりの困難を感じている難民の方々との関わりが増えている。彼らにとっては、まずは「安全で安心な」日々の暮らしを確保することが最優先事項であり、そのために日本語学習へのニーズは非常に高い。そうした状況を反映してか、ここ数年、難民支援団体それぞれが、関わる難民の方々のニーズを反映した日本語教育を積極的に行うようになってきた。以前に比べれば、団体間での個別の情報共有は活発に行われるようになってきている。 平成29年度、当団体が文化庁「「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラム(A)」を受託した際には「難民への日本語教育を俯瞰する」と題した講座を開催し、初めて関係団体と一緒に会し、それぞれが実施する日本語教育の取組や課題について知り、考える機会をもつことができた。 今後さらに、難民支援団体間の情報共有が密に行われ、難民の方々が「安全で安心な」毎日を送れるよう日本語教育がそれを支えて行くこと、難民の方々のニーズにあった、より良質の日本語教育が行われることが期待される。実効性のある、具体的な方策を検討していかなければならない。 また、これまで、その抱える困難の大きさや個人情報の保護の観点から、なかなか難民に対する日本語教育が、他の定住外国人に対する日本語教育に資する部分は少なかったように思われるが、より多様な外国人住民の定住化が進むであろう現状を鑑み、今後は、難民に対する日本語教育の実践が、地域日本語教室の活動に貢献できる可能性も高くなるだろうと考えられる
本事業の対象とする空白地域の状況	—
事業内容の概要	当団体では、2012年以来、「「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラム(A)」を受託し、とくに「生活力向上のワークショップ」、「日本語教室」において、「防災」に関する学びの場を数多く提供することができた。その有用性を強く感じている。しかし、その一方で、「防災」については、より頻繁に学びの機会を得ないと、すぐにその意識が低下していくということ、当団体に関わる方々だけが学んでいれば発災時の問題が解決するわけでもなく、より多くの外国人住民、日本人住民が「防災」について学び、考え、災害時に協力しあえる体制をつくっておく必要があることを実感していた。 また、当団体は先の文化庁事業を受託し、2013年以来、東京を中心とする多くの地域のボランティアを対象に、その資質向上を目指した講座を実施してきた。受講者の中には、講座受講をきっかけに地域日本語教室でのボランティアを始めた方もいれば、異なる教室の方々がつながり、情報の共有をはかったり、教室運営について相談しあったりするというゆるやかなネットワークが形成されてきている。 そこで、「事業の目的」にあるように、地域日本語教室を外国人住民の「防災」日本語学習の拠点と位置付けることができる、ある程度の素地が整ったのではないかと考え、事業を進めた。 事業概要は以下の通りである。 事業1(募集要項 取組①⑤に該当)「モノをつくる」 「本気で防災日本語紙芝居」を作成した。作成にあたり、「防災・日本語ネットワーク会議」で内容等の検討、「教材作成委員会」で日本語テキストの検討を行った。 ※事業申請段階では、「本気で防災を考える日本語教育評価委員会(仮称)」の発足を検討していたが、第1回運営委員会において、本事業実施のために、まずは関わる方々からのヒアリングを丁寧に行うべきであるということ、「評価」という名称は趣旨にそわないのではないかという指摘があり、「防災・日本語ネットワーク会議」を結成し、委員の方々や在住外国人の方々との対話を通じて意見を吸い上げた。「本気で防災日本語紙芝居」の内容や、普及の仕方などを主たるテーマとした。

	事業2(募集要項 取組②に該当)「実践＋モデルの提示」 ・「体験を通して学ぶ導入期日本語講座」(以下「日本語教室」)、「さぼうと21学習支援室」2か所(事業対象外)において、「防災を積極的に教室活動に取り入れた日本語教室」の実践を進めた。 ・「生活力向上のためのワークショップ」において「防災センター訪問」をより有意義なものとするため、事前学習、事後学習を行った。 ・通常の日本語教室活動の中で、既存のリソースの有効利用を考え、実践した。 事業3(募集要項 取組③④に該当) 体制整備のための担い手の育成＋成果の発信と理解の促進 「地域日本語教室ボランティアのための活動基礎講座」(以下「活動基礎講座」)を行った。今年度事業では、防災学習の「担い手」育成のため、以下に注力した。 ・「活動基礎講座」全10講座のうち、とくに「やさしい日本語」の講座の中で、「外国人住民と防災」を取り上げた。 ・地域日本語教育に長くかかわる方々と、最近活動を始めたばかりの方が共に学ぶ機会を設けるべく、「活動基礎講座」の一部については、過去受講者に積極的に案内をし、「拡大版」講座として実施した。「拡大版」講座を、様々な活動歴の日本語学習支援者が共に学ぶ場として位置付け、「ブラッシュアップ講座」に代えた。 ・公開シンポジウム「外国人住民と防災」を実施し、その中で、今年度の当団体の取り組みを報告した。
事業の実施期間	2019 年 5 月～ 2020年 3 月 (11か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	高橋 敬子	(社福)さばうと21・事務局長
2	岡田 正幸	アトラス行政書士事務所・代表
3	奥原 淳子	早稲田大学日本語教育研究センター他・講師
4	中川 康弘	中央大学経済学部・准教授
5	人見 泰弘	武蔵大学 社会学部・准教授
6	矢崎 理恵	(公財)中国帰国者支援・交流センター他・講師 (社福)さばうと21・学習支援室コーディネーター
7	LIA CING LAM MANG	公財)アジア福祉教育財団・難民事業本部・臨時職員



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	令和元年6月22日 (土) 19:00～21:00	2時間	(特非)AAR Japan 難民を助ける会 会議室 (東京都品川区上大崎2-12-2 ミズホビル6階)	高橋 敬子 岡田 正幸 奥原 淳子 LIA CING LAM MANG 矢崎 理恵	1. 本年度事業の計画説明 2. 本年度事業の進め方について ※事業実施体制、スケジュール、内容についての再検討
2	令和2年3月16日 (月) 16:00～18:00	2時間	(特非)AAR Japan 難民を助ける会 会議室 (東京都品川区上大崎2-12-2 ミズホビル6階)	高橋 敬子 岡田 正幸 奥原 淳子 LIA CING LAM MANG 矢崎 理恵	1. 本年度事業の成果報告 2. 本年度事業の振り返り、課題の共有 3. 次年度の事業展開について

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制

以下のような協働、連携を目指しているが、今年度事業においては、教材作成をする中で、(特非)プラス・アーツとの関係構築が大きく進んだ。
また、活動基礎講座、シンポジウム等を通じて、地域の日本語学習支援者との顔の見える関係がさらに進んでいる。

連携

地域日本語教育ネットワーク
東京日本語ボランティア・ネットワーク、
埼玉日本語ネットワーク等

行政、地域の国際交流関連団体
品川区(国際課)、東京都国際交流
委員会、(一財)自治体国際化協会等

地域日本語教室ボランティア
東京、埼玉、神奈川、千葉等

教育機関 等
明治学院大学(内なる国際化プロジェ
クト)、大正大学、(一財)柳井正財団

<ゆるやかな連携団体>

協働

(特非)なんみん
フォーラム FRJ
(難民支援団体)

さばうと21

(公財)アジア福祉教育
財団 難民事業本部
(特に条約難民と
その家族の支援)

<難民支援関連団体>

協働

(特非)
プラス・アーツ
(防災啓発活動)

(特非)
国際活動市民中心
(CINGA)
(在住外国人の相談)

ひらがなネット(株)
(在住外国人への情報
提供、出版事業等)

<協働団体>

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制

【防災・日本語ネットワーク会議】

-プラス・アーツ
(小倉丈佳・石田有香)
-山浦 育子
-伴野 崇生
-さばうと21
(高橋敬子・矢崎理恵)

【運営委員会】

運営委員長:高橋敬子
(全体総括・予算執行者)
その他委員6名

全体コーディネーター:
矢崎理恵

さばうと21事務局:
柴田 経奈
(広報、事務、会計等担
当)

関連団体

※ 各取り組みについては、以下のように小委員会を設けて検討する
★コーディネーター ★副コーディネーター 下線は中核メンバー

①「防災関連教材作成検討委員会」

★矢崎理恵・奥原淳子・高橋敬子＝計3名

「本気で防災日本語教材」作成のための検討を行う
とくに「外国人にわかりやすい日本語表現かどうか」についての検討に
注力する

②「日本語教室検討小委員会」

★田中幸雄王・★矢崎理恵・中川美保(指導者)＝計3名

日本語教室の指導方法や内容、評価方法等について検討を行う。また、
毎回指導者による報告書の確認を全員で行い教室の質の充実を図る。
コーディネーターは小委員会全体の連絡調整を行い、他団体との交渉
や内部調整、事務局と協力しての広報活動、さばうと21学習支援室との
調整を図る。

③「人材育成検討小委員会」※会議は行わなかった

★奥原淳子・★矢崎理恵・長崎清美＝計3名

「シンポ」「基礎講座」「BU講座」について、講座内容の検討、講師や会
場の手配調整を行う。実施前後の受講者のフォローを行う。
広報に関しては、事務局が中心となって行う。

3. 各取組の報告

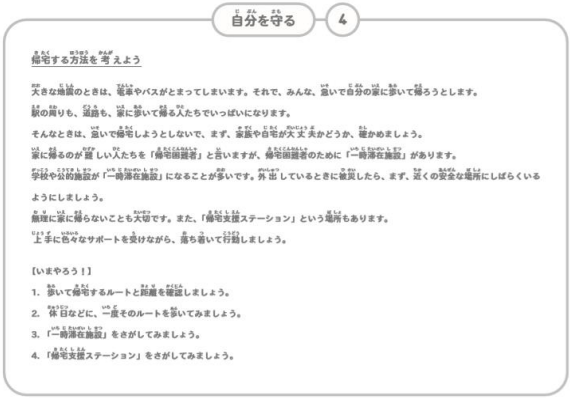
＜取組1＞										
取組の名称		外国人住民のための「本気で防災紙芝居型日本語教材」の作成								
取組の目標		・地域日本語教室が防災学習の拠点として機能するために必要な教材を完成させる ・「防災の専門家」と「日本語教育の専門家」「難民支援団体や外国人支援団体」が協働し、その連携を強める								
取組の内容		1 外国人住民のための「本気で防災紙芝居型日本語教材」を作成した ●地域日本語教室で使いやすいよう、「毎回」「10分程度で」「1回1項目」、「紙芝居型教材」を基本とした教材 ●1項目 A3カード（両面）× 20テーマ ●表面は、文字を少なくし、わかりやすいイラストで、印象に残ることを優先させた ●裏面は、日常生活で日本語をつかってやりとりができる程度の外国人を想定して、やさしい日本語で表現することを心掛けた 中国人学習者のことも考え、漢字かな交じり文とし、全てひらがなのルビをふった ●扱った項目 ＜自分を守る＞ ①「もしも」のために「いつも」から備えよう□ ②「ゆれている」と感じたら、まず自分を守ろう ③台風や大雨のときは早く避難しよう□ ④帰宅する方法を考えよう□ ＜家族を守る＞ ⑤連絡のルールを家族と話し合おう ＜コミュニティを守る＞ ⑥消火器が使えるようになろう ⑦勇気を出して応急手当をしよう ⑧地域の人と協力して、助け合おう ⑨「ランタン」と「ヘッドライト」を備えよう ⑩「ラジオ」「携帯電話」「充電器」を備えよう ＜生活を守る＞ ⑪ 家族みんなの「飲み水」を準備しよう ⑫「オーラルケア用品」を備えよう□ ⑬「手洗い・体ふき用品」を備えよう ⑭キッチングッズを上手に使おう ⑮カセットコンロ・ボンベを備えよう□ ⑯「携帯トイレ」を備えよう ⑰自分の好きな非常食を備えよう ⑱地域の避難所を確認しよう ⑲家の中の安全対策をチェックしよう ⑳家の中の安全対策をチェックしよう 2 教材作成にあたり、「防災・日本語ネットワーク会議」を通じて、防災に関する意見の吸い上げを行った ●ヒアリング、意見交換等を行った方々 LIA CING LAM MANG(本事業運営委員)、高橋敬子(本事業運営委員)、チンカイ(当団体学習支援室元受講者) 伴野崇生(本事業取組④防災・日本語ネットワーク委員会委員) (特非)プラス・アーツ 小倉文佳、石田有香(本事業取組④防災・日本語ネットワーク委員会委員) 山浦育子(本事業取組④防災・日本語ネットワーク委員会委員) ●ヒアリングで得られた知見 ・定住する外国人にとっては、災害は大きな恐怖であると同時に、「しかたない」「どうしようもない」という受け止め方も大いにある ・外国人にとっては、防災に限らないが、情報が届きにくく、また、更新されにくい ・防災専門家にとっては、何が分かりやすい表現で、何が分かりにくい表現かの判断が難しい(日本人向けに「印象に残る表現の仕方」と外国人向けに「印象に残る表現の仕方」が異なる								
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動	—								
取組による体制整備		日本人住民にとっても外国人住民にとっても扱いやすい防災についての「日本語教材」が作成されたことにより、地域日本語教室での防災の学びが有効に進むであろう。すでに複数の日本語教室や日本語学習支援者、国際交流協会から、教材についての問い合わせがあった。 「地域日本語教室の拠点的機能の充実」がはかられ、「防災をめぐる地域日本語教育体制の整備」が大きく進むことが期待される。								
取組による日本語能力の向上		毎回教室で、同じテーマについて連続して学べる教材ができたことで、「防災」についての日本語習得が進み、さらにそのテーマについて、日本人住民と外国人住民との間のやりとりが促進されるであろう。「防災」については、日本人住民、外国人住民を問わず、共有されるべき、かつ共有されやすいテーマであることから、誰でも同じ関心をもって取り組むことができる。 また、教室に通学ができない状況にある外国人住民も、「防災」という「必要情報」がわかりやすく提供されることで、日本語習得の意欲を大いに高めるであろう。								
参加対象者		—				参加者数 (内 外国人数)		— 人(人)		
広報及び募集方法		作成した教材については、「シンポジウム」「活動基礎講座」「拡大版活動基礎講座」での紹介、当団体のホームページでの公開により、広報を進めていく								
開催時間数		(総時間 時間) 教材をどのように利用するかで、要する時間数は変わる (例) 10分×20回＝200分～				(内訳 1回 10分 × 20 回)				
主な連携・協働先		(特非)プラス・アーツ								
受講者の出身 (ルーツ)・国別内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
※該当する場合のみ										

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

・(特非)プラス・アーツとの協働により教材作成を進める過程で、「防災・日本語ネットワーク委員会」において、様々な意見をうかがいながら、「教材作成委員会」において、とくに裏面の日本語表現について検討を重ねた。

※以下の写真は、「教材作成委員会」において、日本語の表現検討を行った際の様子、完成した教材の表面と裏面である



(2) 目標の達成状況・成果

・予定していた20枚の紙芝居が完成した。今後の普及用に「データ」(1テーマごと、全データ通しで用意)、「ラミネートありの普及用紙芝居一式」を用意することができた。

・完成が遅れたことから、実際に教室で利用した結果の報告は次年度以降となるが、何人かの外国人住民、支援団体関係者に完成した教材を共有した際には「わかりやすい」という声を多くいただき、実際に教室でも利用してみたいという声が多かった。とくに通訳・翻訳業務に従事する運営委員から「この日本語なら、翻訳しやすく、ありがたい」という評価を得た。普段聞きなれない言葉も多い分野であるだけに、「わかりやすい日本語」で表現できていることは、とくにコミュニティ通訳、翻訳にあたる方々にも助けになるだろう。

・(特非)プラス・アーツ(以下、「プラス・アーツ」)との協働作業を時間をかけて行ったことも大きな成果のひとつである。防災の専門家集団であるプラス・アーツの方々から、様々な防災活動の手法を学べたというだけでなく、プラス・アーツの方々に、外国人住民がどのような困難を抱えているのか、また、多少日本語ができる外国人の方々にとって、どのような日本語が難しいのかについて理解を深めていただけた。「見えやすい目標に向かって、協働作業を時間をかけて行う」ことは、様々な分野における「専門家」の方々に、外国人住民について理解を深めていただくために、有効な手段であると言える。

(3) 今後の改善点について

・今回、「防災・日本語ネットワーク会議」と「教材作成委員会」の二本立てにして、取組を進めたが、今年度事業である程度の工程が見えてきたことから、この委員会を一つにまとめ、より多くの外国人住民に参画してもらうことで、外国人住民、日本語教育の専門家、外国人支援団体、日本語学習支援者等が顔を合わせて防災について意見を交換できる場所に発展できると考える。

「地域日本語教室を難民等外国人住民の「防災」日本語学習の拠点として位置づけ、「防災」に関する日本語学習をきっかけに、地域日本語教室、外国人コミュニティ、外国人支援団体、自治体等をつないだ日本語教育の体制整備を進めていく」という本事業の目的達成がより促されるであろう。

<取組2－1>

取組の名称		難民のための参加型日本語教室の実施 「体験を通して学ぶ導入期の日本語教室」									
取組の目標		・体験を通して学ぶ参加型の日本語教室への参加により、外国人住民（難民）が日本人とのコミュニケーションをおそれず、自ら考え、行動できるような気持ちをもてるようになること。最低限必要な生活上の行為が達成できるようになること。 ・日本語教室での学びを通して、外国人住民（難民）、先輩外国人住民、日本人住民が互いを尊重しあってコミュニケーションをとる楽しさを知り、日本社会の一員として共に暮らしていこうという意識をもてるようになること ・教室活動の中に「防災」を無理なく取り入れた地域日本語教室のモデルを提示する									
取組の内容		●1 全体の構成 指導者、ボランティア参加者、学習者（受講者）が体験を通して共に学ぶ日本語教室を展開 具体的な「体験」:「防災」「街歩き」「料理」「おしゃべりタイム」など ※いくつかの「目に見える分かりやすい体験」を重ねながら、その過程での外国人住民、日本人住民、相互理解の深まりを期待。 ●2 教室の時間等 授業時間:毎週土曜日等13:00-16:10・3時間／回・全20回（計60時間） ●3 1回の授業の流れ(1回3時間)※内容により柔軟に変更 ① 挨拶・日にちの確認・出欠(10分) ②学習者の識字レベルに合わせた文字学習(60分) ③ 行動・体験を通じての課題達成(100分) ④共有と振り返り・「振り返りシート」記入(10分) ●4 使用教材 『社会参加のための日本語通信講座』『にほんごえじてん』『はじめましてにほんご』、文化庁委託事業により当団体が作成した教材を積極的に活用した ●5 その他 ・日本語学習支援者の人材育成を念頭におき、日本語教育及び外国人支援に興味のある日本人や先輩外国人にボランティアとして講座に参加してもらった ・当団体が2019年度文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」を受託し、実施した「難民等に対する日本語教師<初任>研修」受講者から2名に、指導補助者（ボランティア）として関わってもらった。 ・新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、受講者の中には参加を見合わせる者が現れた。また、会場も利用できなくなった。受講者の中でも日本語学習の必要性の高かった者たちの学習継続の方法を模索し、指導者変更、会場変更により、教室開催を3月まで続けた。とはいえ、半数以上が参加を途中で断念し、当初の計画通りに日本語学習を進められなかったことは、緊急事態とはいえ、非常に残念である。									
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動	—									
取組による体制整備		今年度は、「地域日本語教室を外国人住民の防災日本語学習の拠点に」を目的として、事業を展開したが、本取組により、導入期の段階にある日本語学習者を対象とした日本語教室の活動に「防災」を無理なく取り入れた学習のモデルを提示することができた。									
取組による日本語能力の向上		・防災をテーマに学ぶ機会を増やし、「防災」への関心を深め、知識を増やすことにより、受講者の話す材料を蓄積したことにより、日本語習得が促進された。									
参加対象者		【教室】 東京近郊に在住する難民で日本語でのコミュニケーションがほとんどとれない人					参加者数 (内 外国人数)		【教室】 18人(11人)		
広報及び募集方法		・なんみんフォーラム参加各団体へのメール、当団体のホームページ、チラシ(日英2カ国語)により、募集を行った ・学習支援室既受講者による口コミ									
開催時間数		総時間 60 時間				内訳 3 時間 × 20 回					
主な連携・協働先		なんみんフォーラム参加各団体、(特非)プラス・アーツ									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	
	※該当する場合のみミャンマー(8人)、ウガンダ(1人)、ナイジェリア(1人)、シリア(1人)										
実施内容											
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
1	令和1年11月23日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	4	自己紹介	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「自己紹介ができる」 あいさつ、国名、趣味、好きなもの・こと		中川美保	ボランティア1名		
2	令和1年11月30日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	3	自己紹介	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「少し詳しく自己紹介ができる」 前回の復習、年月日の表現、家族の呼び方、疑問詞		中川美保	(大戸航)		
3	令和1年12月7日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	3	欠席連絡	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「欠席・遅刻の連絡ができる」 ①前回の復習 ②電話のかけ方 ③理由の言い方		中川美保	ボランティア1名		

4	令和1年12月14日(土) 13時-16時10分	3	さぼうと21	4	病気・病院①	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「体の症状を伝えられる」「医者 of 指示を理解できる」 ①体の部位を表すことば ②症状を表すことば ③受診時の会話	中川美保	(山本 佳奈)
5	令和2年1月4日(土) 13時-16時10分	3	さぼうと21	2	街歩き① (準備)	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「目的地までの行き方や電車を調べることができる」 ①スマホ日本語の文字入力 ②地図・路線アプリを使って調べる ③駅のことば／駅へ行ってみる ④生活で困ったこと、よく行く店について話す	中川美保	(大戸航)
6	令和2年1月11日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	2	街歩き② (本番)	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「買いたいものを探すことができる」 ①行く店を決める ②店で使う言葉を学ぶ ③外出し店を探す ④店で物品を探し購入する⑤振り返り C)「防災センター訪問準備」 ①防災館案内を読む ②集合場所・時間の確認 ③集合場所への行き方を調べる ④道を聞くための言葉の確認	中川美保	(大戸航)
7	令和2年1月18日(土) 13時-16時10分	3	池袋防災館	4	防災① (防災体験ツアー)	防災体験ツアーに参加し、災害について知り、どのように備えるかを学ぶ ①地震体験 ②煙体験 ③消化体験 ④救急体験 ⑤防災に関する展示見学 ⑥ふりかえり	中川美保	LASHI ROI SAN (大戸航)
8	令和2年1月25日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	4	防災② (災害に備える)	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「防災体験を振り返り、防災の意識を持つ」 ①防災体験ツアーを振り返る(含:災害時の言葉の復習)②災害時の言葉の復習 ③自宅の住所を覚え避難場所を把握する ④非常時持ち出し袋の中身について考える	中川美保	(大戸航)
9	令和2年2月1日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	3	おしゃべりタイム ① (準備)	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「自分の国や町について表現することができる」 ①おしゃべりタイムの説明 ②スピーチの内容検討 ③スピーチを書く ④スピーチ用の写真を探し印刷	中川美保	(大戸航)
10	令和2年2月8日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン、AAR 事務所、さぼうと21	5	おしゃべりタイム② (発表)	「自分の国や町について日本語でスピーチすることができる」「ボランティアと日本語でおしゃべりできる」 ①本日の流れ確認 ②スピーチ練習 ③司会決定、リハーサル ④おしゃべりタイム本番 ⑤振り返り	中川美保	(大戸航)
11	令和2年2月15日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	7	トライ日本の味① (準備、買い物)	「スーパーで必要なものを買うことができる」 ①メニューの提示 ②調味料について知る ③手巻き寿司の具選び、購入食材の決定 ④スーパー見学、食材の買い出し	中川美保	植木千津 (大戸航)
12	令和2年2月22日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	4	トライ日本の味② (調理実習)	「料理作りを通して、日本の文化や食習慣を知る」 ①本日の流れ確認 ②調理実習 ③配膳、実食 ④片付け(含:ゴミの分別)⑤レシピ作成、まとめ	中川美保	植木千津 (大戸航)
13	令和2年2月29日(土) 13時-16時10分	3	にほんごタウン	1	まとめ	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「今までの授業を振り返ることができる」「今後の課題を見つけることができる」 ①コースで行った内容を振り返る ②マインドマップ	中川美保	(大戸航)
14	令和2年3月5日(木) 13時-16時10分	3	ひかりハウス	3	防災③ (避難所へ行く)	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「避難所の場所を知る」 ①道案内の表現 ②避難所までの行き方を調べる ③参加者同士で道案内をしながら避難所へ行く	大戸航	ボランティア1名
15	令和2年3月7日(土) 13時-16時10分	3	ひかりハウス	3	病気・病院②	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「体の症状を伝えられる」「医者 of 指示を理解できる」 ①体の部位を表すことば ②症状を表すことば ③受診時の会話 ※「病気・病院①」の復習	大戸航	—
16	令和2年3月8日(日) 13時-16時10分	3	ひかりハウス	3	余暇を楽しむ	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「人を誘ってイベント等に行くことができる」 ①イベント等の表現 ②イベント等について話す ③時間の表現 ④誘うときの表現 ⑤会話練習	大戸航	—
17	令和2年3月9日(月) 13時-16時10分	3	ひかりハウス	3	人とかかわる	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)目標「相手の持ち物や服装をほめて、話のきっかけを作ることができる」 ①色の表現 ②洋服、持ち物の表現 ③形容詞＋名詞の表現 ④ほめる表現 ⑤相手の服、持ち物をほめる	大戸航	ボランティア1名
18	令和2年3月12日(木) 13時-16時10分	3	ひかりハウス	3	人とかかわる	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「待ち合わせの相手に連絡することができる」 ①待ち合わせの表現 ②遅れる場合の表現 ③待ち合わせや遅れる場合のロールプレイ	大戸航	—
19	令和2年3月14日(土) 13時-16時10分	3	ひかりハウス	3	人とかかわる	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「生活習慣について話すことができる」 ①家事等の日常生活の表現 ②昨日何をしたか話す ③一週間に何回などの表現 ④互いの習慣について聞きあう	大戸航	ボランティア1名
20	令和2年3月16日(月) 13時-16時10分	3	ひかりハウス	3	人とかかわる	A)参加者の識字レベルに合わせた文字学習 B)「行先を調べて出かける段取りを整える」 ①近くに映画館について調べてみる ②誘う表現、待ち合わせ表現の復習 ③友達を誘うロールプレイ	大戸航	ボランティア1名

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第7、8、14回 令和2年1月18、25日、3月5日】

■活動名:防災

■目標:池袋防災館の防災体験ツアーに参加、体験・体感を契機に災害について知り、どのように備えるかを学ぶ

■受講者側からみた活動の流れ

第1週:防災体験ツアー参加

- ①池袋防災館に定刻に集合する(通行人に道を尋ねたり、乗り換え検索アプリ、google mapなどを活用)
- ②防災体験ツアー参加(地震体験、煙体験、消火体験、救急体験)
- ③防災に関する展示見学
- ④その日のふりかえり

第2週:災害に備える

- ⑤防災体験ツアーを振り返る(含:災害時の言葉の復習)
- ⑥自宅の住所を覚え避難場所を把握する
- ⑦非常時持ち出し袋の中身について考える
- ⑧災害時の言葉の復習

第3週:避難場所へ行く

- ⑨道案内の表現の復習
- ⑩避難場所までの行き方を調べる
- ⑪参加者同士で道案内をしながら避難場所へ行く



○取組事例②

【第9、10回 令和2年2月1日、8日】

■活動名:おしゃべりタイム

■概要:「日本人との日本語でのやりとり」を楽しむ活動

■目標:人前で話題提供のスピーチができる。日本語で発信し、積極的にコミュニケーションをとることができる。

■受講者側からみた活動の流れ

第1週:準備

- ①「おしゃべりタイム」のスピーチを作成、練習をする。司会を決め、進行の練習もする。
- ②日本人ボランティアへの質問を考える

第2週:発表

- ③受講者の司会の下、各受講者が簡単なスピーチをする。
- ④受講者と日本人ボランティアのペアでおしゃべりを楽しむ。
- ⑤「自己紹介」「自国紹介」「日本人ボランティアへの質問」を基本の流れに、自由に話をすすめる。
- ⑥終了後、分からなかった表現を質問したり、感想を述べ合ったりする。
- ⑦日本人ボランティアからのメッセージを読む。



(2) 目標の達成状況・成果

コース終了後、受講者に面談を実施し本事業の評価を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う自粛要請により、面談の実施を見送った。このため、受講者からの本事業に対する直接の声を聞くことはできていないが、受講時の様子からうかがえたことを記す。

1、受講者の目標「外国人住民(難民)が日本人とのコミュニケーションをおそれず、自ら考え、行動できるような気持ちをもてるようになること。最低限必要な生活上の行為が達成できるようになること」について
→十分に達成されたと考える。教室でのひらがな学習をきっかけに自宅でも自習に取り組む者、足を運んだことのない店に行き新たな発見をする者、日本の生活習慣を知り自分の生活に取り入れようとする者など、本教室への参加が日本語学習に対する意欲を高め、様々な体験ができたという達成感から日本語を話すことに自信を持てるようになり、更に自宅等で日本語学習を行うモチベーションとなっている様子がうかがえた。本教室が、受講者に対し日本社会で生きていくために自律的に日本語学習を継続するきっかけを提供できたともいえる。

2、ボランティア参加者の目標「活動を通じて、外国人住民(難民)、先輩外国人住民、日本人住民が互いを尊重しあってコミュニケーションをとる楽しさを知り、日本社会の一員として共に暮らしていこうという意識をもてるようになること」について
→十分に達成されたと考える。今年度は外国人支援に関心のある成人及び大学生や日本語教師(初任程度)が参加した。いずれも活動を通して、日本に暮らす外国人(特に活動の対象となる難民)について理解を深め、わかりやすいコミュニケーションの仕方を学ぶ姿が見られた。特に後者については、教室への参加を通して身につけた生活者としての外国人に対する日本語教育に必要な知識、技能、態度等を是非日本語教育機関での日本語教育にも活かしていただきたい。本教室が日本語教育の人材育成に様々な役割を果たしたということができよう。

(3) 今後の改善点について

本事業で3人目となる新たな指導者を迎え、これまで本事業で確立してきたシラバスを基にコースを展開することができた。当該シラバスが本コースを新たに担当する指導者にとっても汎用性があり応用可能なものであるということがいえよう。今後は、指導者が今年度の教授経験をもとに、受講者のレベルやニーズ、状況に応じてより柔軟に教授内容をアレンジしていくことを期待したい。

＜取組2-2＞										
取組の名称		難民のための参加型日本語教室の実施 「生活力向上のためのワークショップ」								
取組の目標		・日本語でのコミュニケーションに不自由を感じる段階にある外国人住民も含めて、生活上必要な情報や知識を知り、生活力を向上させることで、定住への備えをすること ・先輩外国人住民が通訳として講座に加わることにより、生活上必要な情報や知識を正しく理解し、生活上のスキルを身につけて、それぞれのコミュニティのキーパーソンとして成長すること ・社会や人への関心をもち、理解を深めることにより、日本語学習意欲を高めること								
取組の内容		●1 全体の構成 今年度は、他の事業によりワークショップを行ったこともあり、本事業では、「防災」に関するワークショップを数回にわたって実施した。 ●2 講座時間、内容等 第1回：5月25日・6月1日・8日 「防災ヘルプカード」作成 ↓ 第2回：6月1日 「災害用伝言ダイヤル」体験 ↓ 第3回：6月1日・8日 防災館での体験について予習 ↓ 第4回：6月15日（午前、午後に分かれて実施） 池袋防災館を訪問し、通訳付きで、防災体験 ↓ 第5回：6月22日・29日 防災館での体験の振り返り ※日本語学習支援者は、一連の体験を共にし、外国人住民の抱える困難や、災害に対する思いを実感しつつ、学習の手助けをしていく。 ●3 使用教材 当団体作成の「防災ヘルプカード」、当団体作成資料 ●4 その他 ・企画・準備段階から、先輩外国人住民（日本語能力試験N1合格者）複数名が情報提供側のメンバーとして活動に協力し、学習者のニーズを広く掬い上げる								
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動	—								
取組による体制整備		日本語教室の活動に「防災」を無理なく取り入れた地域日本語教室のモデルをまとめ、シンポジウム（取組3）において一般に学習モデルの共有をはかった								
取組による日本語能力の向上		毎回教室で、防災をテーマに連続して学ぶことで、防災の知識を身につけながら、それをきっかけに受講者やボランティア参加者間でやりとりが生まれ、日本語習得が促進された								
参加対象者		【WS】 当団体の土曜日の学習支援室に通う外国人および「教室」参加者				参加者数 （内 外国人数）		【全体】 約40人（35人） 【防災館訪問】35人（30人）		
広報及び募集方法		・通常の日本語学習支援の活動の中で行える活動を模索したことから、団体内での告知にて実施した								
開催時間数		総時間 約 3.5 時間			内訳 2.5時間×1回 ＋ 0.5時間×2回					
主な連携・協働先		（特非）プラス・アーツ								
受講者の出身 （ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
										5
※該当する場合のみ		ミャンマー（28人）、アフガニスタン（1人）、スーダン（1人）								
実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名	
1	令和1年6月15日（土） 9時～11時30分	2.5	池袋防災館	10	防災体験	防災館にて、日本語学習支援者と共に、「煙」「消火」「救急」「地震」についての説明を受け、実際に体験をする		—	MA LIA MANG CING KHAI （鈴木弾）	
2	令和1年6月15日（土） 12時30分～15時00分	2.5	池袋防災館	25	防災体験	防災館にて、日本語学習支援者と共に、「煙」「消火」「救急」「地震」についての説明を受け、実際に体験をする		—	LIA CING LAM MANG （鈴木優也）	

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

●実施日時、内容

今年度は、「通常の学習支援の中に無理なく防災学習を取り入れる」ことを考え、5月～6月の通常活動の中に、以下のような時間を設けた。学習時間が個々に異なる当団体の活動では、「一斉に」活動すること自体に無理があり、また、日本語レベルや母語の異なる受講者が「一斉に」学習することは必ずしも学習内容の理解を深められない面がある。よって、6月15日の防災館訪問を一つの目標として据えて、防災に関わる体験、学習を事前事後に組み入れることとした。

第1回:5月25日・6月1日・8日(毎週土曜日の学習時間内)

日本語学習の合間に、個々の学習ペア(学習者と日本語学習支援者)が「防災ヘルプカード」に自分の情報を書き込み、財布に入れることとした。「防災ヘルプカード」は当団体が作成した外国人向けの書き込み式ヘルプカードである。「名前や住所など」「母語」「日本語のレベル」「持病や飲んでいる薬など」「家族や友人の連絡先」「家族との待ち合わせ場所など」を記入する中で、必要な日本語を学び、また、災害時の対応について、日本語学習支援者と自然にやりとりが可能となる。実際に「記入する」「財布に入れる」という行動を促すために、記入が済んだ方々の名前を掲示することとした。

第2回:6月1日

日本語学習の合間に、個々の学習ペアが「災害用伝言ダイヤル」への電話をかける練習をした。「1日」「15日」が、災害用伝言ダイヤルを無料で体験できる日であることから、その日は事務所の電話を使って、学習ペア(受講者と日本語学習支援者)が大学生ボランティアのサポートを受けて、録音、再生の練習をした。

第3回:6月1日・8日

日本語学習の合間に、個々の学習ペア(池袋防災館訪問者)にて、防災館での体験(煙、消火、救急、地震)について記した資料(当団体にて作成)を見ながら、事前の知識を蓄えた。

第4回:6月15日(午前、午後に分かれて実施)⇒取組事例②にて記載

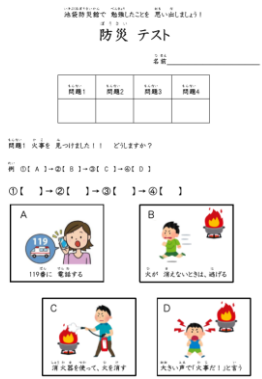
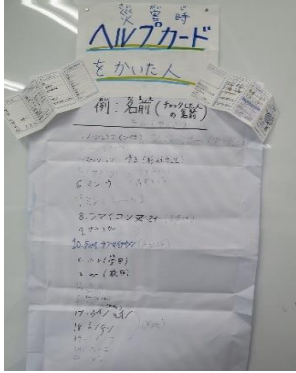
第5回:6月22日・29日

日本語学習の合間に、個々の学習ペア(池袋防災館訪問者)にて、体験の振り返りを行った。簡単なテスト(当団体にて作成)に答えながら、防災館での学びを振り返ることができた。受講者の日本語レベルに合わせて、「見てわかる言葉」「使える言葉」を習得することができた。

※日本語学習支援者は、一連の体験を共にし、外国人住民の抱える困難や、災害に対する思いを実感しつつ、学習の手助けをしていく。

●3 使用教材

当団体作成資料



○取組事例②

●1 実施日時・内容

6月15日(土)、より多くの方々が参加できるよう、午前(9時半～12時)、午後(12時半～15時)に分かれ、池袋防災館を訪問、通訳付きで「煙」「救急」「消火」「地震」の体験を行った

●2 特徴

・今年度の防災館での体験は、事前に「ヘルプカードの記入」「災害用伝言ダイヤルの体験」「事前学習」を経て行われた。また、振り返りのための事後テストが用意された
・例年、体験内容について、「映画」か「救急」かの選択があり、概要を知るために「映画」を選択していたが、通常の学習支援の中でも類似した映像を通訳付きで見ることは可能であり、より「体験」「共助の意識の醸成」を重視して、「救急」をメニューに入れることとした。



(2) 目標の達成状況・成果

一連の防災学習は、今後の参考にもなることから、実施期間中、防災館同行通訳、外国人参加者、日本人参加者等に対して個別にヒアリングを行った。

1、「ヘルプカードの記入」「災害用伝言ダイヤルの体験」「防災館体験」「事前の予備学習」「事後の振り返り」は、全ての工程に参加していた人にとっては、防災について深く理解を深め、必要とされる日本語が、必要とされる場面と共に理解できて、「良かった」とする意見が多かった。ただ「体験したときはよく覚えているが、時間が経つと忘れてしまうので、また実施してほしい」という声も聞かれた。

2、一方、一連の活動の一部にしか参加をしなかった人にとっては、それぞれの活動が「どんな場面を想定した、どのような活動なのか」を具体的にイメージすることができず、消化不良の形で終わっていた。

3、簡易なものではあるが、防災館訪問のための事前資料、事後振り返りテストは、活動への理解を深めるために有効であった。日本語学習支援者からも、「分かりやすい資料があれば、やりとりがしやすくなる」という感想があった。また、資料の内容が多すぎないことで、どのレベルの受講者にも取り組みやすく、またレベルに合わせて「発展」させられる（インターネットで情報を調べる、疑問点について話し合う等）という利点がある。

(3) 今後の改善点について

体験直後は、防災についての理解も深まり、防災への意識もしっかりもつことができるが、時間が経てば、知識はあいまいなものとなり、意識は低下する。継続的に防災学習を続けていく仕組みを整えていく必要がある

＜取組3＞	
取組の名称	地域日本語教室ボランティアのためのパワーアップ研修 「活動基礎講座」(※一部「拡大版講座」として実施)、公開シンポジウム「外国人住民と防災」
取組の目標	＜全講座共通＞ 今年度の事業目的である「防災」を活動に取り入れた教室活動への理解を深め、その推進役となる日本語学習支援者を増やす 地域日本語教室で活動するボランティアのゆるやかなネットワークをつくる ＜一般公開シンポジウム「外国人住民と防災」＞ より多くの日本人住民が「外国人住民と防災」「防災と日本語」「地域日本語教室の役割」について理解を深める。 ＜「活動基礎講座」＞ 地域日本語教室で活動を始めるボランティアが、外国人住民との対等な関係づくりを旨とする「日本語学習支援」について理解を深め、そこに必要とされる知識や姿勢、技能を身につける ＜拡大版「活動基礎講座」＞※以下「内容」に★マークにて記載 地域日本語教室で活動経験のあるボランティアが、「日本語学習支援」について、その多様な広がりを知り、そこに必要とされる知識や姿勢、技能を改めて学び、各人の所属する教室の活動を再考し、より良い活動を目指す
取組の内容	【地域日本語教室ボランティアのための活動基礎講座】(「活動基礎講座」) ●対象 日本語教室のボランティアに関心のある方、活動を始めたばかりの方 ●講座時間等 月に1回、日曜日に実施 10時～12時、13時～15時・4時間／回・全5回 20時間を2期(5月～9月、11月～3月) ●全体の構成 1回4時間の講座の2時間はキーワードを「多文化共生」として実施、2時間はキーワードを「日本語学習支援」として実施 「多文化共生」 ①「多文化共生とは／地域日本語教室に期待される役割」 ②「在留資格の基礎の基礎を知る」 ③「異文化理解」(「レヌカの学び」体験) ④「「聴く」の基礎の基礎」 ⑤「外国人からの相談を受けたら」 「日本語学習支援」 ①地域日本語教育の実践を知る ②特定の対象者に対する日本語教育を知る ③やさしい日本語(※「防災」との関係にも言及) ④⑤日本語学習支援の基礎の基礎(「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案)を含む) ●その他 ・できる限り「現場を知る」専門家に講義を依頼している ・「多文化共生」①、「日本語学習支援」①②の講座は毎回講師が変わる ※この部分は、過去受講者(地域日本語教室で活動経験のあるボランティア、過去の活動基礎講座受講者にも公開し、事業申請段階の「ブラッシュアップ講座」に代わるものとして実施した ・その他の講座は、講師は前年度より固定、大まかな内容も同様として、内容の充実を図った ・内容検討にあたっては『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)』(文化審議会国語分科会・平成30年)を参考としている 【シンポジウム「外国人住民と防災」】 ※3月に予定していたシンポジウムは、新型コロナウイルス感染拡大により、実施見送りを含めて検討していたが、ZOOMを利用したオンライン講座の形で実施に至った ●対象: 当団体の研修に参加したことのある日本語学習支援者等20名限定 ●実施日時、全体の構成、内容 日時: 2020年3月15日(日) 11時～ 参加者のZOOM利用の学習サポート(個別で対応) 13時～ 基調講演 土井 佳彦さん(文化庁 地域日本語教育施策推進アドバイザー)「私と日本語教育と防災」 14時10分～ 現場からの発信①～群馬県館林から～ 近藤 花雪さん(社会福祉法人 日本国際社会事業団)「女性のための日本語教室」における 防災への取り組み」 15時00分～ 現場からの発信②～東京都品川区から～ 矢崎理恵(社会福祉法人さぼうとにじゅういち)「外国人住民と防災～さぼうと21での実践～」 15時30分終了(メールフォームにてアンケートに回答)

		●その他 今年度はオンライン参加によるシンポジウムということで、事前学習のサポート等を考慮し、当団体の活動を知る、過去の講座受講者（何かしらのやりとりが過去にあった方々）に限定して、シンポジウムを行った								
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動	—								
取組による体制整備		防災をめぐる日本語教育の体制整備を目指し、「地域日本語教室の拠点的機能の充実」および「地域日本語教室、外国人コミュニティ、外国人支援団体、自治体等のネットワークの構築」を進めていく。そのための理解者を増やしていくと共に、「担い手」を育成する								
取組による日本語能力の向上		本取組は、「日本語学習支援者」の育成の取り組みであることから、直接外国人住民の日本語力向上に資するものではないが、外国人住民のニーズや求めを考慮した日本語学習支援者が増え、地域に理解者が増えていくことは、外国人住民の日本語習得に大きく貢献する								
参加対象者		【活動基礎講座】地域日本語教室でボランティアを始めて間もない方 拡大版については、すでに活動経験の長い方も含める 【シンポジウム】地域日本語教室で活動中の方				参加者数 （内 外国人数）		【基礎講座】75人（1人） 【シンポジウム】16人（一）		
広報及び募集方法		1 東京日本語ボランティア・ネットワーク(TNVN)、埼玉日本語ネットワーク、房総多文化日本語ねっと多文化共生教育研究会、（公財）かながわ国際交流財団 等のメーリングリストでの案内 2 当団体ホームページで案内掲載 3 過去の研修会参加者などへのメールでの案内								
開催時間数		総時間 42時間 【活動基礎講座】 40時間 【シンポジウム】 約2時間				【活動基礎講座】1回4時間×5回×2期 【シンポジウム】1回2時間×1回				
主な連携・協働先		東京都行政書士会品川支部、（特非）国際活動市民中心、明治学院大学、（社福）日本国際社会事業団								
受講者の出身 （ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	1									76
	※該当する場合のみ									
実施内容 ＜活動基礎講座・春夏＞										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名	
1	令和元年6月16日（日） 10時～12時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	30	★拡大版 地域での日本語教育の実践に学ぶ	「にほんごのへや」（さいたま観光国際協会）での実践の報告、当事者からの発信		松尾 恭子	青木 グラシア プリスキラ エルサベク イルジュ	
1	令和元年6月16日（日） 13時～15時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	27	★拡大版 多文化共生社会の中で、地域日本語教室に期待される役割	「多文化を背景に持って日本で暮らすということ」のタイトルにて、外国にルーツをもつ立場でもある講師の経験談も含めての講義		松田 デレク	—	
2	令和元年7月7日（日） 10時～12時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	42	★拡大版 特定学習者層への日本語教育を知る	「技能実習生への日本語教育を知る」のタイトルにて講義、話し合い		栗又 由利子	—	
2	令和元年7月7日（日） 13時～15時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	37	日本に暮らす外国人にとっての在留資格とは？	「在留資格（ビザ）～入管法が導く外国人との共生社会を読み解く羅針盤として～」をベースにした講義		長岡 由剛	—	
3	令和元年8月4日（日） 10時～12時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	21	「やさしい日本語」って？	「日本社会とことば」についての講義、「やさしい日本語」化をワーク中心に学習、災害時の「やさしい日本語」の有用性についても言及		岩田 一成	—	
3	令和元年8月4日（日） 13時～15時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	22	「異文化を理解する」って？	開発教育教材「レヌカの学び」を使用した参加型学習を通して、異文化に接する際に必要な心構えについて学ぶ		田中 美穂子	—	
4	令和元年9月1日（日） 10時～12時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	23	日本語学習支援のきそのきそ1	「基本用語の確認」ののち、「対話型の支援方法」「外国人が日本で暮らすために必要なことば」についてグループワーク中心に学ぶ		岩田 一成	—	
4	令和元年9月1日（日） 13時～15時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	24	上手な聴き手になるには？	「「共感的理解」を持った聴き手になる—「会話泥棒」にならないために」のタイトルでワーク中心の研修		大瀧 敦子	—	
5	令和元年10月27日（日） 10時～12時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	15	日本語学習支援のきそのきそ	「日本語ってどんな言語？」「日本語教育の文法シラバス」「日本語の語彙あれこれ」を具体的文例や語彙で考える		岩田 一成	—	
5	令和元年10月27日（日） 13時～15時	2	（特非）AAR Japan 難民を助ける会 会議室	16	外国人からの相談を受けたら？	「身近な外国人からこんな相談・・・あなたならどうする？」のワークの後に、「「外国人相談」とは」「外国人相談の最前線としての地域日本語教室」について情報提供、具体的対応策の学びあい		新居 みどり	—	

実施内容 <活動基礎講座・秋冬>								
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和元年11月3日(日) 10時～12時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	20	★拡大版 多文化共生の社会 の中で、地域日本語 教室に期待される役 割	「移民とは」「日本人？外国人？」「日常での 経験」など、外国にルーツをもつ立場での視 点からの講義	下地 ローレン ス 吉孝	—
1	令和元年11月3日(日) 13時～15時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	22	★拡大版 地域での日本語教育 の実践に学ぶ	「西東京市における多文化共生の地域づく りと地域日本語教室」のタイトルで、3人でス タートした日本語教室がどのように行政等と 連携をはかり、活動を展開させたか	山辺 真理 子	—
2	令和元年12月15日 (日) 10時～12時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	20	日本に暮らす外国人 にとっての在留資格 とは？	「在留資格？」「在留資格について知る」(日 本に在留する外国人、在留資格の種類(資 格外活動、在留カード、手続きなど))、 「人」から考える在留資格」「在留資格と日 本語力」の流れで講義	蓬田 あけ み	—
2	令和元年12月15日 (日) 13時～15時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	20	★拡大版 特定学習者層への 日本語教育を知る	「介護人材」への「日本語教育を知る」のタイ トルで「外国人介護人材とは・・・」「介護の日 本語とは」「実践の紹介」についてEPA介護 福祉士の経験談を交えながら講義	野村 愛	モンティシリヨ シンデレラ メイ リベ ラ
3	令和2年1月12日(日) 10時～12時	2	目黒さつきビル	21	「異文化を理解す る」って？	開発教育教材「レヌカの学び」を使用した参 加型学習を通して、異文化に接する際に必要 な心構えについて学ぶ	田中 美穂子	—
3	令和2年1月12日(日) 13時～15時	2	目黒さつきビル	21	「やさしい日本語」っ て？	「日本社会とことば」についての講義、「やさ しい日本語」化をワーク中心に学習、災害時 の「やさしい日本語」の有用性についても言 及	岩田 一成	—
4	令和2年2月23日(日) 10時～12時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	12	上手な聴き手になる には？	「共感的理解」を持った聴き手になる— 「会話泥棒」にならないために」のタイトルで ワーク中心の研修	大瀧 敦子	—
4	令和2年2月23日(日) 13時～15時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	13	日本語学習支援のき そのきそ1	「基本用語の確認」ののち、「対話型の支援 方法」「外国人が日本で暮らすために必要な ことば」についてグループワーク中心に学ぶ	岩田 一成	—
5	令和2年3月1日(日) 10時～12時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	12	外国人からの相談を 受けたら？	「身近な外国人からこんな相談・・・あなたな らどうする？」のワークの後に、「外国人相 談」とは」「外国人相談の最前線としての地 域日本語教室」について情報提供、具体的 対応策の学びあい	新居 みどり	—
5	令和2年3月1日(日) 13時～15時	2	(特非)AAR Japan 難民を 助ける会 会議 室	12	日本語学習支援のき そのきそ2	「日本語ってどんな言語？」「日本語教育の 文法シラバス」「日本語の語彙あれこれ」を 具体的文例や語彙で考える	岩田 一成	—
実施内容 <シンポジウム>								
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和2年3月15日(日) 13時～15時30分	2.5	さぼうと21事務 所 ＋ オンラインで 在宅参加	16	外国人住民と防災	1 基調講演 質疑応答 2 現場からの発信① 質疑応答 3 現場からの発信② 質疑応答	土井 佳彦 近藤 花雪 矢崎 理恵	矢崎 理恵(講義補助者) 操作サポートボランティア1名

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【活動基礎講座・春夏・第1回 令和元年6月16日】

「地域での日本語教育の実践」に学ぶ
松尾恭子さんより、「にほんごのへや」(さいたま観光国際協会)の活動実践をご報告いただいた。
以下の流れで細やかに実践の紹介があった

1. 会話中心の「にほんごのへや」(さいたま観光国際協会・国際交流センター)＊教科書を使わない活動 どうやって進めたらいいの？
2. 「生活のためのにほんごを日本語で支援する」という明確な方針のもと、様々な課題をどのように克服しているかの具体的なお話
3. 「2007年10月 開始」時の様々なやりとり、話し合いの上で活動がスタートしていく様子など、具体的なお話
4. 活動紹介ビデオ
5. 学習者の声＊「にほんごのへや」で学んだ当事者2名が自分の言葉で「にほんごのへや」での学びを語ってくださった
6. 教材の紹介

地域日本語教室が、活動開始時に1つの理想図を定め、明確な方針のもと、課題を解決しながら展開する様子が、学習者の声もまじえて詳細に共有された



2019 年度 「活動基礎講座」
第1回 6月16日

1. 午前:「地域での日本語教育の実践」に学ぶ-「にほんごのへや」(さいたま観光国際協会)-は、「地域
日本語教育の活動を理解する」のに役立ちましたか。○をつけてください。

大変役に立った 役に立った どちらでもない あまり役に立たなかった 全く役に立たなかった

どのような点からどのように感じられましたか。また、何かご意見等ありましたら、ご自由にお書きください。

日本語支援のボランティアを始めたばかりで、会話を通じて何を教える
ことが出来るのか、どうやってお話しすれば良いのかがわかりません
でした。本日のお話しを聞いて、支援対象者の方が
何を求めているのかわかり、そこから会話を広げて行くのが
わかりました。

【シンポジウム 令和2年3月15日】

「外国人住民と防災」のテーマで、シンポジウム実施を企画検討していたが、新型コロナウイルス感染拡大が想定外に進行し、運営員会で話し合いの上、一般公開のシンポジウムは、ZOOMを利用したオンラインシンポジウムの形で実施することとなった
その結果、不特定多数の参加への対応は困難と判断し、かつてさぼうと21の研修や講座に参加したことのある方々、当団体のボランティアのみに案内を送り、参加者も最大20名に限定して実施することとなった

■一日の流れ

10時～ ホスト側準備開始

10時半～ 「ZOOM」事前トライアル開始(参加申込者には、予め「トライアル」の希望の有無を確認した)、必要に応じて電話対応

13時～ 操作サポートのボランティアの協力を得て、シンポジウム開始

- 1 基調講演 土井佳彦さん「私と日本語教育と防災」のテーマで、パワーポイント資料を共有しながらの講義
質疑応答(順調に進行)
- 2 現場からの発信①～群馬県館林から～ 近藤 花雪さん(社会福祉法人 日本国際社会事業団)より
「女性のための日本語教室」における 防災への取り組み」の報告
- 3 現場からの発信②～東京都品川区から～ 矢崎理恵(社会福祉法人さぼうとにじゅういち)より、さぼうと21がこれまで行ってきた
「防災」や「災害時支援」の取り組みを紹介、今年度事業で作成した「本気で防災紙芝居型日本語教材」を紹介した

※15時30分終了時にメールフォームのリンク先をチャットで送付し、アンケートに代えた

※写真左は、講座開始時、ホスト側から撮影、写真右は参加者事前アンケート、ZOOM未経験者(赤)、事前トライアル希望者(青)



(2) 目標の達成状況・成果

1、それぞれの目標の達成度を、受講者アンケートの結果、受講者から聞かれた感想等をもとに記す。

<全講座共通>

●今年度の事業目的である「防災」を活動に取り入れた教室活動への理解を深め、その推進役となる日本語学習支援者を増やす

⇒「活動基礎講座」では、春夏、秋冬とも「やさしい日本語」って?」の回で「防災」「災害時」について学ぶ機会がある。アンケート回答の中に「緊急時のために日本語教室のボランティアの中で話し合ってみようと思った」他、防災についての言及が見られ、目標は達成されていると思われる

⇒「シンポジウム」は、「外国人住民と防災」のテーマで行っていることから、受講者は初めからこのテーマに関心の高い方々であったが、具体的な活動事例等から、さらに関心を高めた印象を受ける。アンケート回答のあった14名中11名が「(シンポジウムは)とてもよかった」と評価している。

加えて、自由記述欄には、「所属している日本語教室では、毎年行政から防災教室(講座)実施の声かけがあるものの、上手に活用・活動できていない現状があります。今後の活動のヒントとなるお話、大変勉強になりました。」「地域での教室活動の意味や、その役割の再認識をする機会になりました。また、防災に関して、情報提供と割り切ってよいところ、相互の安心安全な生活のためにより、深めて話していくべきところなど、ポイントがわかりやすく理解できました。」「今日の講座も参考にしながら、我々の日本語教室が外国人市民の防災のために重要な役割を担えるようになりたいと考えています。」など、目標が達成されていることを実感する。

●地域日本語教室で活動するボランティアのゆるやかなネットワークをつくる

⇒講座参加者は、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、静岡県からの参加が見られる。とくに「拡大版活動基礎講座」はすでに「活動基礎講座」を修了した方々も、興味をもって参加をしてくださっている。教室内での声掛けで新たに講座に参加する方々の数も増えている。「ゆるやかなネットワーク」が確実に広がっていると言えよう。

<一般公開シンポジウム「外国人住民と防災」>

●より多くの日本人住民が「外国人住民と防災」「防災と日本語」「地域日本語教室の役割」について理解を深める。

⇒目標は十分に達成された。詳細は先に述べた通りである。

<「活動基礎講座」>

地域日本語教室で活動を始めるボランティアが、外国人住民との対等な関係づくりを旨とする「日本語学習支援」について理解を深め、そこに必要とされる知識や姿勢、技能を身につける

⇒受講者に毎回実施したアンケートでは、「大変役に立った」63%、「役に立った」33%で、講座全体への満足度が非常に高いことが分かる。中でも、「地域日本語教育の事例報告」や「相談対応」、「技能実習生への日本語教育」等の評価が高く、受講者が日々の活動を意識しながら、受講している様子がうかがわれる。

<拡大版「活動基礎講座」>

地域日本語教室で活動経験のあるボランティアが、「日本語学習支援」について、その多様な広がりを知り、そこに必要とされる知識や姿勢、技能を改めて学び、各人の所属する教室の活動を再考し、より良い活動を目指す

⇒拡大版のみ参加した受講者を選び分けてアンケート集計を行っていないが、每期、10名程度の参加者(活動基礎講座修了者の再受講)がみられることから、受講者の講座への評価、満足度は高く、また、常に謙虚に講座で学ぶ姿勢を持ち続けて下さっていることに敬意を表したい。

2 その他成果

シンポジウムをオンライン講座として実施したことによる混乱を懸念したが、結果的には、アンケートに「会場を借りてのシンポのほかに、こうしたwebを活用した場も大切だと思います。」「遠隔地を結んでこれだけのことができれば、活用しない手はないと思いました。」という感想が書かれるなど、講座での学びに加え、参加者各人が活動先の教室等でオンラインによる活動を具体的に進める契機となった。

春夏講座には、実践女子大学の高木裕子ゼミの学生がボランティアで講座準備、受付等にあたってくださった。地域日本語教室の理解を深める上でも有意義な活動参加であった。

(3) 今後の改善点について

- ・5期目を終了した「活動基礎講座」については、全10講座のうち3講座について、過去受講修了者の参加も認めるという形が定着し、ゆるやかなネットワークが形成されつつあることから、「地域日本語教室を外国人住民の防災学習の拠点に」という目的の中で欠かすことのできない「担い手」育成の素地が整いつつある。
- 今後、さらに日本語学習支援者にとって有益と感じられる講座を続けていくために、様々な日本語教室で活動する日本語学習支援者の声をすくい上げていく工夫が必要であろう。
- ・シンポジウムについては、受講者からの評価が高かった。「外国人住民と防災」という本事業の目的に直結するテーマでもあり、シリーズ化させて継続していくのが、効果的ではないかと思われる。内容についての再検討が必要と思われる。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

【目的】

本事業の目的は、地域日本語教室を難民等外国人住民の「防災」日本語学習の拠点として位置づけ、「防災」に関する日本語学習をきっかけに、地域日本語教室、外国人コミュニティー、外国人支援団体、自治体等をつないだ日本語教育の体制整備を進めていくことである。自助共助の意識を強くもった外国人住民・日本人住民が育っていくことを期待している。

【今年度の目標】

- 外国人住民が「防災」について学ぶために有効な紙芝居型防災教材「本気で防災を学ぶ紙芝居型日本語教材」(以下「本気で防災日本語紙芝居」)を完成させる
- 教室活動の中に「防災」を無理なく取り入れた地域日本語教室のモデルを提示する
- 「防災」を教室活動に積極的に取り入れる意識をもった「担い手」を育成する
- 「外国人住民と防災」「防災と日本語」の重要性を認識し、「地域日本語教室」の有用性を理解する人を増やす
- 地域日本語教室、外国人コミュニティー、外国人支援団体、自治体等の連携の基盤をつくることを目指し、まずは難民支援団体を中心にした「本気で防災を考える日本語教育評価委員会」を発足させる

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

・「地域日本語教室を難民等外国人住民の「防災」日本語学習の拠点として位置づける」という3か年事業の目的を達成するために必要な素地はできあがりつつあり、事業は順調に進んでいる。

5点掲げた今年度の目標について検証する

- 「本気で防災日本語紙芝居」は予定通り完成した
- 「地域日本語教室のモデル」は、本報告において今年度の取り組みを記載している
- 「担い手」の育成は、本報告の「取組3」の「(2) 目標の達成状況・成果」に記した通り、シンポジウム受講者へのアンケートの評価、コメントからある程度の成果があったと言える
- また、同様に、本報告の「取組3」の「(2) 目標の達成状況・成果」に記した通り、「活動基礎講座」「シンポジウム」を通じて、「外国人住民と防災」「防災と日本語」の重要性を認識し、「地域日本語教室」の有用性を理解する人を増やすことができた
- 「難民支援団体を中心にした「本気で防災を考える日本語教育評価委員会」については、今年度は「防災・日本語ネットワーク会議」として、今後の事業展開に必要な情報を得るべく、委員との個別のやりとりを中心に連携を深めた。次年度以降は、完成した「本気で防災日本語紙芝居」をもって、その普及を検討することを一つの共通の目的として、より適当な形を検討し、連携の基盤を固めていきたい

(3) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

・今年度は、「本気で防災日本語紙芝居」の完成に向けて、(特非)プラス・アーツ、日本語教育の専門家、外国につながる団体職員等とのやりとりを重ねた。そのことが互いの理解を深め、連携を強める結果につながった。より良質の教材の完成という成果があった。

・「活動基礎講座」もすでに第4期目、第5期目を実施したこととなる。学びの場を共有することが、異なる地域で活動する日本語学習支援者の間に「共に学ぶ仲間」という意識をもたせ、話し合いや情報の交換が良い方向に展開させる。地域に根差さない団体であればこそ、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県といった、異なる地域で活躍する日本語学習支援者が出会う場を提供できている。

(4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

・参加者への周知・広報は、ホームページへの掲載、複数のメーリスへの投稿により行っているが、最も効果的なのは、過去に当団体の研修や講座に参加した方々への案内メールである。過去受講者が直接再度講座に参加することもあれば、所属する教室や知人に情報を共有してくださることもあり、最も確実な広報手段となっている。さらに、研修受講者から、所属する教室関係者を紹介されたり、勉強会講師の依頼を受けたりすることもある。「ゆるやかな、顔の見えるネットワーク」は、本事業の目的を達成するという点からも大切なつながりである。

・本事業の成果は、3月15日に実施した「シンポジウム」で発信をした。たとえば作成した教材も、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、実物を手に取ってもらって、作成の意図を知らせたりすることはできずにいるが、次年度以降、普及パッケージのようなものを検討し、発信に努めたい。

(5) 改善点、今後の課題について

・地域日本語教室で活躍する日本語学習支援者の多くが、「防災」「発災時対応」等に関心をもっていることが、「活動基礎講座」「シンポジウム」等を通じて、強く感じられた。

「関心」は高いが、「具体的に何ができるか」が分からずにいるのが現状である。

そのために、①地域日本語教室を、単に日本語学習の場としてとらえず、「定期的に外国人が集まる場」としてとらえ、教室が果たしうる役割を共に考える場の提供が必要である。また、②今年度事業で完成した「本気で防災日本語紙芝居」や、教室で取り組みやすい防災学習の手段を検討し、共有していくことも、大きな意義があるだろう。

(6) その他参考資料

- 1 日本語教室開催案内チラシ
- 2 防災館訪問案内チラシ
- 3 活動基礎講座(春夏)案内チラシ
- 4 活動基礎講座(秋冬)案内チラシ
- 5 シンポジウム案内チラシ